

(二〇二二年度一般選抜B)

## 国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は表紙を除き十二ページである。)

### 受験についての注意

- 一、 監督の指示があるまで、問題を開いてはならない。
- 二、 携帯電話・スマートフォンの電源は切ること。
- 三、 時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 四、 試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の受験番号欄の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。
- 五、 解答用紙は三枚ある。解答は解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、 監督から試験開始の合図があったら、この問題の冊子が、右に記したページ数通りそろっているかどうか確かめること。
- 七、 筆記具は、H、F、HBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆やボールペンなどを使用してはならない。訂正する場合は、消しゴムで丁寧に消すこと。消しゴムはきれいに取り除くこと。
- 八、 解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、 試験時間中に退場してはならない。
- 十、 問題冊子と解答用紙を持ち帰ってはならない。

以下の文章を読み、設問に答えなさい。

私たちが様々の美しい浮き彫りの彫刻を見ると、浮き彫りはどういう形でわたしたちに見られているだろうか。浮き彫りの浮き上がっている面からいつも見えている。けれどもその陰には浮き上がっている厚さだけの深くぼみがある。人生も浮き彫りのようで、光線をてりかえして浮き上がっている面の陰には、それだけへこんだ面があり、明るさがあればそれに添った影がある。

文学は人生社会の諸相を、眼の前にまざまざと見え感するように描き出す。そこで社会の明るさと暗さはどういう関係において見られるのだろうか。ここに文学の新しい見方があると思う。婦人と文学という問題をとりあげて、それを人類と文学の歴史という問題から見ると、第一に（A）何故世界の婦人は、これまで男のひとたちよりも文学史的活動をしてこなかったのだろうかという疑問が起こってくる。婦人の文学における立場は、知られているとおり、文学史の第一ページから男によって描かれるものとしての婦人であり、創作の対象としてとりあげられている婦人である。このことは意味深い事実だと思う。世界文学の最も古典のものとしていつも語られるギリシアの詩人ホーマーの「イリアード」のなかに、この描かれるものとしての第一の女性が現われている。「イリアード」の中のヘレネは非常に美しく、美しい女性の典型として描かれている。ヘレネは美しさにおいては、ヴィナスのようにも美しかったのであろうが、社会的な存在としてホーマーが彼女を描いているところをみれば、美しきヘレネは当時の支配者たちの、闘争における一人の「かけもの」のような立場におかれている。世界文学にあらわれた第一の女はそのような争奪物としての位置であり「イリアード」が字にかかれる時代には、ギリシアにも、もう家長制度というものが出来上っていたことを示している。ギリシアは自由な国であるとされ、ギリシアの文化はヨーロッパ文明の泉となったけれども、その自由、その文化は奴隷制の上に立っていた。奴隷が畠を耕し織物を織り、家畜を飼って――生活に必要な労働を負担して、ギリシアの自由人の文化生活の可能をつくり出していた。このような地下室つきの自由の上で、たとえギリシアの女の自由というようなことを言ったとしても、現実には女奴隷がその社会に存在しているからには、今日私たちの感情で理解するような本当の自由というものには存在しなかったというのが事実である。ギリシア神話

そのものにも、この婦人の立場はよくあらわれていて、たとえばヴィナスは描かれ彫られ、女性の美しさの典型と考えられているが、どの彫刻を見ても、いつもヴィナスは、見られるように観賞物としての女としてあらわれている。織ものをしていてヴィナスを見たひとがあるだろうか。

子供を育てている普通の女の姿でヴィナスを見た人があるだろうか。キューピッドという彼女の男の子は、いつも恋の使いとして、金の弓矢をもつてヴィナスのそばにいて、ヴィナスの母としての人生、妻としての人生などは見たことがない。彼女は多く裸体で、女性の美しさを発揮しながら、必ず（1）無為の姿であらわされている。ギリシアの生活で働かない女の美しさだけを描いたということは注目されずにないのである。（1）ヴィナスやヘレネのように女性が芸術の上にあらわれたというところに、人類社会の歴史にあらわれている権力の形の――婦人の悲劇の発端がある。

こうして婦人のうけみな社会的立場をおのずから反映してうけみな対象として文学に導きいれられた婦人は、ルネッサンスの時代、文芸復興期になって、どういう変化をうけたろう。

ルネッサンスは、最も早く商業が発達して市民階級の経済的・政治的実力のたかまったイタリアに十四世紀からおこりはじめた。そして、フランス、イギリス、ドイツと全ヨーロッパに拡がって、それまでの中世的な暗い王権と宗教との圧迫から、自由ののびのびと人間性を解放しようとする運動となり、社会生活と文化は全面的にヨーロッパの近代への扉をひらきはじめた時代であった。

ルネッサンスの時代が進んでからは、婦人の社会的な生きかたもひろがりをもちはじめ、スペインのコルドヴァ大学などで婦人の学者も数人あらわれた。ルネッサンス時代の豊富さ、人間性の横溢（注1）を代表する芸術家の一人としてシェークスピアの戯曲が、いつも話題にのぼって来る。シェークスピアの戯曲の登場人物は実に多種多様で、社会の現実そのもののように豊富な特徴としている。人間の可憐さ、狡猾さ（注2）、奸智（注3）、無邪気さ、あらゆる強烈な欲望が描かれていて、そこに登場する婦人も、決して一様ではない。マクベス夫人のようにおそろしい女から、リア王の三人娘のような諸性格、ロミオとの悲しい愛に命をおとしたジュリエットのような姫から、「ウインザアの陽気

な女房たち」「奸婦ならし」(注4)の闊達おてんばな女、ハムレットの不幸な愛人としてのオフエリアなど、千変万化の女性があらわれている。

ところで、きょう私たちがこのシェイクスピアの有名な傑作「オセロ」をみると、その女主人公デスデモーナの運命について、実に痛切に感じるものがある。

オセロはアフリカ生れの黒人の武将であった。(ア) ゆうかんな勝利者としてデスデモーナという、美しいヨーロッパの貴婦人を妻にした。

ところがオセロの幕下(注5)にイヤゴーという奸物(注6)がいる。イヤゴーは単純で正直な人々の生活を、自分の奸智でかき乱して、その効果をよろこぶという、たちのわるい生れつきである。従順で、この上なく美しいデスデモーナと、黒いオセロの睦まじい性格は彼の奸智を刺激した。機会をうかがっていたイヤゴーは一つのきっかけをとらえた。その不幸をオセロにうちあけないでいるうちに、イヤゴーはオセロの猜疑と嫉妬をかきたてることに成功した。黒人のオセロは、ただ良人として嫉妬したばかりでなく、一人の人間として、デスデモーナの(2)浮薄さに自分の(イ)いげんを傷つけられたことをも、たえがたく感じて遂にデスデモーナを殺し、自殺してしまう。オセロはシェイクスピアの悲劇の中でも、イヤゴーの奸智、オセロの直情、デスデモーナの浄らかな愛情との点で、今日も活々とした感動を与える作品である。デスデモーナは一枚の見事なハンカチーフをもっていた。それはオセロがくれたもので、なくさないように、もしこれをなくしたら、あなたの愛も失われたと思うよ、という意味を云われて、愛のしるしとしておくられたものであった。イヤゴーの目がそのハンカチーフにひかれた。彼はもち前の巧みなやりかたで、そのハンカチーフをデスデモーナから盗んだ。(あ)、それはデスデモーナがそっとくれたもののように、周囲に思いこませた。

ハンカチーフを失ったデスデモーナの当惑と心配とはいじらしいくらいなのに、デスデモーナはその大切なハンカチーフがなくなったことについては、ひとこともオセロに話さず、さがすことに協力をもとめていない。

けれども、この悲劇をみているとわたしたち女性の胸は、デスデモーナへの同情にふるえとともに、(三)デスデモーナへの齒がゆさで煮えて来る。どうして、デスデモーナ！ 良人のオセロをそれほど愛しているのなら、率直に早くハンカチーフのとられたことを告白して、その不安や困惑を、オセロとともにわかとうとしないのだろうか、と。デスデモーナは、オセロを熱愛しながら、一方で(3)畏怖している。オセロの愛のはげしさをうけみにおそれて、これをなくさないように、と云われたその言葉の力に圧せられ、麻痺させられてしまっている。デスデモーナのこの分別のない過度の従順さ、清浄さ、無邪気さ、品のよさのために、オセロの悲劇は防ぐことが出来なかった。

ルネッサンスに、こういう作品の出来ていることを、わたしたちは意味ふかくうけとらずにはいられない。ルネッサンスは婦人の人間性も解放したけれどもその人間性は、デスデモーナにおいて、どんなにまで受動的であり、分別が不たしかであやうげなものだろう。私達の今日の常識でいえば、非常に大事なハンカチーフをなくした場合は、貴方からいただいたハンカチーフをなくしました、どうか一緒に探して下さいと告げると思う。見つからなくて、非常に叱られたとしても、そのことによって自分の愛情が変わっていないこと、失くなったのは一つの災難であるということを確認してもらおう。何故ならハンカチーフはものにすぎない。ここで本質的な問題は夫婦の愛の問題である。愛のしるしのハンカチーフは失われても、愛は守らなければならないし守られ得る。(い)人間の自主的で、状況をのりこしてゆく愛情があるわけである。ところがデスデモーナをみると、ルネッサンス時代の上流の婦人というものがそういうふうに分達の愛を守り自分達の悲劇を防いでゆく能力はかけていたということが考えられる。女性のいじらしさとして、男の側からデスデモーナのような性格がみられていたということにもなる。デスデモーナの悲劇は、限らないオセロへの従順さ、献身が、はつきりした判断と意志とを欠いていたために、事態を悪い方へ悪い方へと発展させイヤゴの奸智に成功を与えるモメントとなっている。こういうデスデモーナを思うとき、私たちの心には、自然さっきのヘレネの問題につづく婦人の立場ということが考えられて来る。

ルネッサンスはデスデモーナに、皮膚の色のちがうオセロを愛させる感情のひろがりをもとめたが、その愛を完成する知性までは開花させていない。ルネッサンス時代は文学作品ばかりでなく、絵画に彫刻に雄大な作品が花と咲き満ちた時期であった。けれどもじっと見ていると、ミ

ケランジエロの絵のなかには何か憂鬱がある。有名なバチカンの壁画など見ていると、宇宙的なミケランジエロの雄渾さとともに一種ののがせない憂鬱がある。ミケランジエロの伝記を読むと、彼があればほどの才能を持ちながら、法王の我ままと気まぐれのためにどんなに圧迫されたかがよくわかる。ルネッサンスの半面には、まだまだ封建的な苦しいものがあり、法王と芸術家の関係にさえそれが残っていたことがわかる。

当時の法王は、ミケランジエロの才能を認めながら、自分の絶対性を信じる習慣から封建的で、ミケランジエロの芸術家としての人間性を十分認めなかった。ミケランジエロの巨大な才能と大きな人間性のなかには、いつも自分を出し切れない不安があった。丁度デステモーナが愛と一緒にいつもオセロを恐がっていたと同じように。ミケランジエロは自分の才能と一緒に法王を恐れなければならなかった。

ルネッサンスの表は、華麗豪華な厚肉浮彫の歴史であるが、その陰の部分には封建性が濃くのこっていた。例えばレオナルド・ダ・ヴィンチのモナ・リザはどういう笑いを今日にのこしているだろうか。モナ・リザの微笑は、それが描かれた時代から謎のほほ笑みと云われて来ている。モナ・リザの笑いは、それを見つめている人の心を深くあやしく魅して気を狂わすような微笑と云われている。このモナ・リザのほほ笑みは解放された女のほほ笑みではなく、やはりデステモーナの不安と、ミケランジエロの憂鬱につながったものであると思う。

世界的な謎の微笑をほほ笑んでいるダ・ヴィンチのこの婦人像は、唇、頬、そして眼の中でほほ笑んでいるだけで、歯をみせて嬉々として笑ってはいない。モナ・リザはじつと何か見つめている。そのまなざしは非常に深く、こころをたたえているが、それも決して嬉しさにきらきらしている眼ではない。重い、ふっくりと美しい瞼の下の憂鬱な視線である。(う) 彼女は、あんなにじつと見つめて、じつと笑いをもっている。モナ・リザ、ジョコンダの笑いの本質はどういうものなのだろう。私たちは女としての自分の心から、モナ・リザとレオナルド・ダ・ヴィンチの心情の中に迫って見ようと思う。

レオナルド・ダ・ヴィンチは、この美しいモナ・リザの肖像にとりかかって数年間を(ウ) つい やしたが、到頭未完成で終ってしまった。レオナルドほどの画家が、一つの肖像画に着手して数年をかけながら、それが未完成であったというのはどうということだったのだろう。レオナ

ルド・ダ・ヴィンチが一応、モナ・リザを描き終ったと思う間もなく、モナ・リザの顔の上に、眼の中に、そして唇の上に、忽ちこれまでレオナルドの発見しなかった何か一つの新しい人間的な情感、女性としての美しさが閃き出たということを語ってはいはしないだろうか。

富貴な美しいモナ・リザを描くとき、レオナルドがどんなに心をつくして画室をかざり、音楽を奏させ、彼女をたのしくあらせようとしたかという情景は、レオナルド・ダ・ヴィンチを主人公としてメレジェコフスキーが書いた「先駆者」という歴史小説に詳細をきわめている。モナ・リザの幽玄な表情は、レオナルド・ダ・ヴィンチの限りないひろさと深さをもった知性をとおして、あのように把握されているものだけでも、あの幽玄なうちに充実している官能のつよい圧力は、決して、レオナルドの知性の生んだものではないと思う。モナ・リザの成熟した芳しい女性としての全存在には、あのように深い愁いをもったまなざしでどこかを見つめずにはいられない熱い思いがあり、あの優美な手を、そのゆたかな胸におき添えずにはいられない鼓動のつよさがあったのだと思う、そして、また、レオナルドは、何と敏感にそれを感じとり、自分の胸につたえつつ画筆にうつしているだろう。描かれる美しい婦人と、描く聡明なレオナルドとの間に、いつか流れ合う一脈の情感がなかったという方が不自然である。モナ・リザは彼女の感覚によってレオナルドの知性を感じとり、レオナルドは彼のあらゆるデッサンにあらわれているあのおそろしいような人間洞察の能力で、モナ・リザという一人の女性の内奥の微妙な感覚までを把握したのであった。こういう共感が異性の間に生じたとき、これが恋愛の感情でないという場合は非常にすくない。人間同士の調和の最も深いあらわれは、こういうハーモニーにこそあるのだから。

モナ・リザは、彼女の良人に、レオナルド・ダ・ヴィンチとの間に生まれたような複雑微妙な諧調を感じていただろうか、おそらくそうではなかったろう。そして同時に、モナ・リザは、自分のなかに湧きいでた新しい人生の感覚について、それが、どういう種類のものであるかということは、自分に対して明瞭にしていなかったと思われる。（え）、どうして彼女の顔の上にあのように無限に迫りながら、その意志のあきらかでない微笑が漂いつづけたろう。彼女が、はつきり自分の女としての感情の実体をつかんだとき、あのような微笑は、苦痛の表情に飛躍するか、さもなければ大歓喜の輝きに輝き出すかすかにいないものである。

(お)、ここでもまたルネッサンスの感情の姿が考えられる。モナ・リザは、自分の眼をそこからひきはなすことの出来ない快い情感をああやって見つめ、見つめて、我知らず語りつくせない心のかげを映す微笑を浮べてはいるが、ルネッサンス時代の彼女は、そのあこがれに向って行動しなかった。(4)凝視し、ほほ笑み、そのはげしい内面の流れによって永久に一つの肖像を、未完成とレオナルドに感じさせたにとどまった。レオナルドがこの画を未完成としたところも推察される。未完成の肖像は、その依頼者であるモナ・リザの良人の館やかたに送られずすむ。そして、モナ・リザは、果して、レオナルドが、それを未完成として、いつも自分の傍らにとどめておくことに不満を感じたのだろうか。モナ・リザは、父兄の命令によってその選ばれた人との結婚をし、やがて良人の権力のままに一生を送らねばならなかったイタリーの婦人の運命を、自分の情熱によって破ろうとしなかった。ルネッサンスは、モナ・リザにああいう微笑を湛える人間的自由は与えたが、そのさきの独立人としての婦人の社会的行動は制御していたのであった。

こうしてみればルネッサンスの華やかな芸術も、その時代の人達を完全に解放してはいなかったことが明らかである。十八世紀になって、フランスではルソーのような近代的の唯物的の哲学を持った人達が現われて来た。働かねばならないという状態をもたらした産業革命は、この時代から本当に働いて、働くことだけで生きてゆかねばならない勤労大衆を産み出して今日に及んでいる。

プロレタリアの婦人というのが歴史の上に現れはじめた。この時代に、イギリスやフランスに、幾人もの婦人作家が擡頭たいとうした。十九世紀のイギリス文学では、その名を忘れることの出来ないジョージ・エリオット。ジェーン・オースティン。ブロンテ姉妹。ギヤスケル夫人。フランスでは、スタエル夫人をはじめ、日本の読者にもなじみの深いジョルジ・サンドなど。そして注目すべきことは、これらの婦人作家たちがスタエル夫人のほかはみんな中流階級の女性たちであったことである。ジョルジ・サンドは、はじめの結婚にやぶれてのち、生活のために苦闘しながら、女性の権利を主張した「アンジアナ」をかいだし、エリオットも文筆からの収入で生活しなければならぬ婦人として小説をかきはじめた。これらすべての婦人作家が、様々のテーマを扱いながら、結局は、当時の社会が婦人の生涯に与えるフランスの絶対王権でつくり上げられた形式主義と宗教的なものの考え方に対して、人間の自然性というものを強く要求してルソーが現われた。



哲学者、教育者としてのルソーの考え方は、フランスのルイ十四世から十六世ごろまでの猛烈な専制主義に対して、人間の平等と自由独立、女も男もひとしい人間性の上に立つ自由を主張した。近代民主主義の先駆者であったルソーのほかに、ヴォルテールやデイドロのような、近代思想の啓蒙家があらわれた。

一七九三年のフランス大革命によって、フランスおよび全ヨーロッパに新しい(エ)いぶきがふきこまれた。このフランスの大革命の中心人物であったマリイ・アントワネットは、(オ)ふはいしきつていたフランス宮廷生活の中で、その若々しく軽浮であった一生を最も悪く利用された一人の女性であった。けれども彼女の運命は全く受動的で、歴史的にあれば様々の角度から話題とされる生涯を送りながら、マリイ・アントワネット自身は何も書かなかった。オーストリアのマリア・テレサの娘として最も高い教育を受けていたし、最も多い自由も持っていたはずだけれども。彼女の書いたものは、オーストリアの宮廷への密書だけで、ただ一篇の小詩さえかいていない。あのように小詩がはやり、貴婦人の文学熱が高かった時代なのに。こういう例をみても、(三)婦人の地位とか学識だけが芸術を生むものではないということが判る。

ヨーロッパ諸国の資本主義社会がその発展の頂上に近づいた十九世紀になって、ルネッサンス以後十八世紀になってはつきり方向を定めた人間解放の問題が具体化して来て、特にイギリスではどこよりも早く蒸気機関の利用による産業革命が行われ、繊維産業が非常に発達した。イギリスの婦人と子供が非常に沢山工場に働き出した。機械の力は多くの工場から筋肉の力を必要とする仕事に必要であった男を首にして、女房も娘も子供も桎梏しづこくに抗しているところは、十分注目に価する。ジョージ・エリオットは、自分が婦人だとわかると、いろいろうるさい差別待遇がおこるのをいやがって、筆名は男のジョージ・エリオットとしてさえている。ジェーン・オースティンにしても、イギリスの中流家庭で結婚ということについてどんなに打算や(5)滑稽こけな大騒動を演じるかということ、諷刺ふうし的にその「誇りと偏見」の中に書いている。われわれのまわりでも、まだまだ結婚適齢期の娘をもった母親は、時にふれ、折にふれて眼の色を変えている。食べるものも食べないようにしてたんす筆筒を買ったり、着物を拵しらえたり、何時でも売物のように誰かが買いに来るといのように待っている。「女のくせに」ということを男だけではなく女自身が言っている。(B)十九世紀にオースティンが非常に諷刺的に書いた状態は、封建的な風習の多くのこっている日本のなかにはまだつ

よく残っている。同じ十九世紀に、ポーランドの婦人作家オルゼシユコの書いた小説「寡婦マルタ」<sup>かぶ</sup>を、きょう戦争で一家の柱を失った婦人たちがよむとき、マルタの苦しい境遇は、そのまま自分たちの悲惨とあまりそっくりなのに驚かないものはなからう。

（宮本百合子「女性の歴史」―文学にそって」青空文庫、一九四七年、一部編集）

※以上の文章は、昭和期の小説家・評論家である宮本百合子が、第二次世界大戦が終わって間もなくの一九四七年に書いたエッセイ「女性の歴史」―文学にそって」の一部である。引用に際し、一部の漢字にルビや送り仮名をつけ、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。

注1 漲り溢れること。

注2 悪賢いこと。

注3 悪賢い知恵。

注4 今日では「じゃじゃ馬ならし」という題名が用いられている。

注5 主君に仕える従者。

注6 心の曲がった悪い人。

問一 傍線部(1)から(5)の読みをひらがなで書きなさい。(配点各一点)

問二 傍線部(ア)から(オ)を漢字に直しなさい。(配点各一点)

問三 (あ)から(お)に入る語として適切なものを次の中から選び、その記号を記しなさい。なお、同じ語が二度用いられることはないものとする。(配点各一点)

- A さもなければ
- B こうしてみると
- C そして
- D けれども
- E そこに

問四 傍線部(A) 何故世界の婦人は、これまで男のひとたちよりも文学史的活動をしてこなかったのだろうかという問いに対し、筆者はどのように答えようとしているか。古代ギリシアの社会に関して、その内容を六〇から七〇字で述べなさい。

問五 傍線部(一) ヴィナスやヘレネのように女性が芸術の上にあらわれた とは何を意味するか。筆者の意見として最も適切なものを

次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。(配点五点)

- A 古代ギリシアは自由な国であったため、女性の奴隷が芸術上のモチーフになることはなかった。
- B ヴィナスやヘレナが芸術の上に登場したのは、彼女たちが力強さと美しさを併せ持っていたからである。
- C 女性の身体的なプロポーションの美しさが絶対視されたため、精神的な美しさについては表現のテーマにならなかった。
- D 女性が芸術のなかで描かれたのは、社会のなかで活躍する姿ではなく、あくまで観賞される美的対象としてであった。
- E 労働から解放された者のみが美しいという観念があったため、女性は無為の姿で芸術に登場した。

問六 傍線部(二) デステモーナへの齒がゆき とは何を意味するか。筆者の意見として最も適切なものを、次の中から一つ選び、その記

号を記しなさい。(配点五点)

- A デステモーナが、夫であるオセロから、嫉妬ゆえに殺害されてしまったことへの齒がゆき。
- B デステモーナが、オセロから愛のしるしとしてハンカチーフを与えられたことを恐れたことへの齒がゆき。
- C デステモーナが、ハンカチーフが無くなったことを、オセロに打ち明けなかったことへの齒がゆき。
- D デステモーナが、イヤゴの悪巧みを見抜くことができず、つけ入る隙を与えたことへの齒がゆき。
- E デステモーナが、オセロへの清らかな愛情を持ち続けたことへの齒がゆき。

問七 傍線部(三) 婦人の地位とか学識だけが芸術を生むものではない について、筆者の意見として最も適切なものを、次の中から一つ  
選び、その記号を記しなさい。(配点五点)

- A 社会的地位がいくら高くても、高い教育を受けていなければ、女性が芸術を創作することはできない。
- B 旧体制社会において権力者としての地位にとどまる限り、女性が新しい時代の文学を担うことはできない。
- C 水準の高い教育を受けていても、公務に追われて自由な時間が十分にとれないと、女性は何も書くことができない。
- D どれだけ学識が高くても、社会のなかで話題とされることがないと、女性に作品を執筆するチャンスは与えられない。
- E 考えうる最高の教育をうけ、社会的に高い地位につくことができても、それだけで女性が文学に貢献することはできない。

問八 傍線部(B) 十九世紀にオースティンが非常に諷刺的に書いた状態は、封建的な風習の多くのこっっている日本のなかにはまたつよく残  
っている について、(1) 筆者がそう考える理由を、六〇から七〇字で説明しなさい。また(2) 現代日本における女性の社会的地位  
について、あなたはどうか考えるかを、一〇〇から一二〇字で述べなさい。(配点十五点)